

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

－ 思い出の校舎が地域の絆を深め、地域のまとまりで地域が元気に！ －

べつまたのうそんこうぼう
受賞者 **別俣農村工房**
にいがたけんかしわざし
(新潟県柏崎市)

■ 地域の沿革と概要

柏崎市は、南北に広がる新潟県のほぼ中央部に位置し、米山よねやまや黒姫山くろひめやまをはじめとする山々の懷に抱かれた豊かな恵みを受けるとともに、日本海に面した42kmに及ぶ長い海岸線からは佐渡島を望む、風光明媚な地方都市である。

別俣地区は、柏崎市の市街地から南方に約13km、久米くんめ、水上みずかみ、細越ほそごえの3集落からなり、人口は436人（平成22年国勢調査）で、黒姫山の麓に延びる

盆地に約130haの水田が広がる純農山村地域である。当地区では、この黒姫山から流下する豊富な水を用いて、水稻を主体とした農業経営が行われている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

当地区では、平成18年に設立された「別俣農村工房」が主体となり、旧小学校の木造校舎を拠点とした農作業体験や自然体験を中心とする都市農村交流活動を展開している。

この交流活動の中では、木造校舎を改修して、校舎内に新設した農家レストランにおいて、地元の食材を使用した食事メニューを提供しており、都市部等からの来訪者は年々増加している。

また、伝統的な農作業や郷土料理、また地区で古くから行われている

伝統行事等の継承を図るため、子どもから高齢者までの地域住民が積極的

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	38.9%
	総世帯数 149戸
	総農家数 58戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 15戸
	1種兼業農家 5戸
	2種兼業農家 29戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 44,270ha
	耕地面積 5,170ha
	田 4,800ha
	畑 376ha
	耕地率 11.7%
	農家一戸当たり耕地面積 89.1ha

に参加する取組を進めている。この地域振興の取組を柱として地区外との体験交流活動へと広め、地域住民が一体となった活動を展開している。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

当地区では、農村地域に住みながらも、子ども達が農業や自然に触れる機会が少なくなっていることに気づいた当時の別俣小学校のPTAが中心となり、地域の農業者等の協力を得て、平成12年に「別俣田んぼの分校」の取組を開始した。これは、将来、子ども達が成長した時に、“ふるさとを誇りに思うことができる地域づくり”を目指して取り組み始めたのものであった。



写真1 別俣田んぼの分校
(田植え)

さらに、当地区では少子高齢化と人口流出が進む中で、過疎化によるコミュニティ機能の低下が懸念されるなど、地区の将来に不安が生じてきたことから、平成15年に地区内の有志18人が「別俣を考える会」を立ち上げ、年齢や性別の隔たりなく、地区の将来像を語り合うことを始めた。

この「別俣を考える会」では、平成16年に、小学生以上の全住民を対象として、地区の将来の姿に関するアンケート調査を実施し、その結果を集約して「みんなが生き生きと暮らせる地域」というスローガンを決定した。また、地区の将来ビジョンとして「『みんなのふるさと別俣』の4つの基本構想」を設定した。この4つの基本構想の柱ごとに4つの部会を設置し、将来ビジョンの実現に向けて活動を開始した。

「『みんなのふるさと別俣』の4つの基本構想と設置部会名」

- | | |
|------------------------------|--------------|
| ① 自然の中で人と人がふれあい暮らせる別俣づくり | [生き生きふれあい部会] |
| ② 人、自然、文化のさらなる発掘と継承を目指す別俣づくり | [お宝発掘部会] |
| ③ 地域の特産品づくりで明るい農村別俣づくり | [福々産業部会] |
| ④ 木造校舎を活用した体験交流、憩いの場の別俣づくり | [校舎利活用部会] |

このような活動を進めている中で、平成17年に地区のシンボルである別俣小学校の廃校が決定され、校舎の解体・撤去という危機に直面した。この状況に対して「別俣を考える会」では、市内に唯一残る60余年の歴史を

持つ木造校舎を守ることが、“子ども達にふるさとを残すことにつながる”という信念の下、校舎の存続に向け住民の合意形成を進めてきた。その結果、校舎を計画的に利活用を図ることを条件に柏崎市から校舎を譲り受けることとなった。



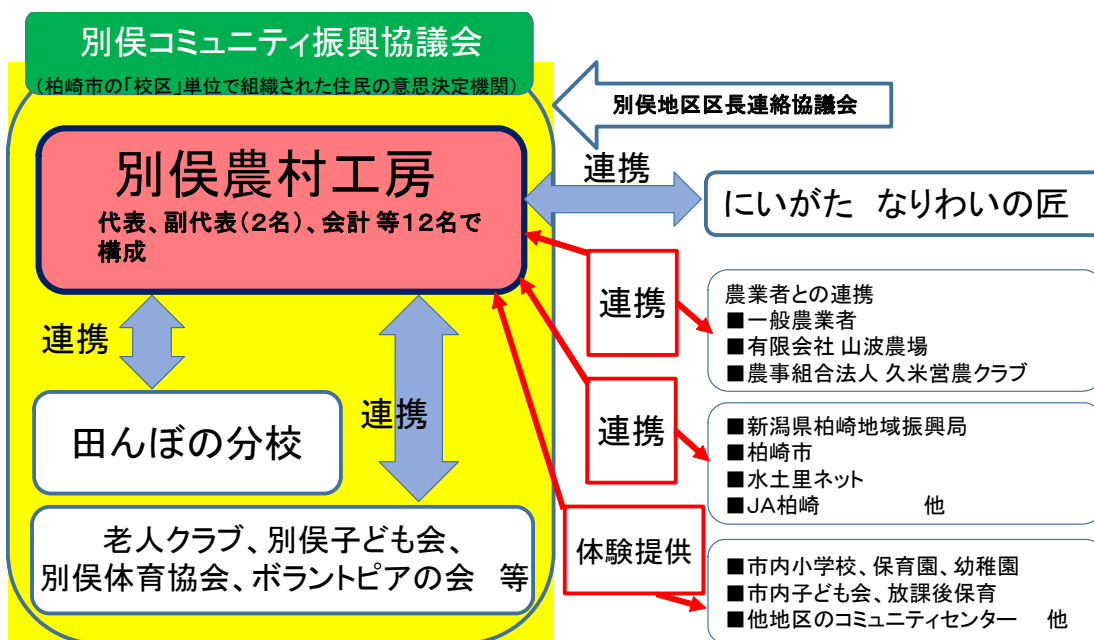
写真2 旧別俣小学校

この校舎存続に結びついた背景として、当地区においては農業生産活動を共同作業として行う状況にあり、また「別俣田んぼの分校」の活動には多くの住民が参加しており、これらの活動を通じて住民間の意思疎通が図られていた。また、この校舎問題に直面した際に、地域を維持するには自らが行動を起こしていくという意識が高まり、多くの住民から理解を得ることに至った。

(2) むらづくりの推進体制

「別俣農村工房」は、地区の有志12人で構成され、組織には代表と副代表（2名）、会計を置いている。定例会は年間6回開催され、地区の将来像に向けた論議を重ねている。

第2図 むらづくり推進体制図



ア 関連組織・団体との関係

① 別俣コミュニティ振興協議会

柏崎市の「校区」単位で組織された地区住民の自主的な地域活動を推進する組織であり、各集落の区長や老人クラブ、子ども会や消防団、

各種任意団体等で構成されている。

「別俣農村工房」は、同協議会の構成団体の一つであり、他の構成団体や地区内の農業者、行政等と連携・協力を図り地域振興の一翼を担っている。

② 地区内の農業者等

地区内の農業者や農業者の組織・団体とは、農作業体験に使用する農地や大型農業機械等の利用協力、作物栽培技術や作業手法等の指導を受けている。

③ 市内の小学校等

「別俣農村工房」の活動における基本的理念である「子ども達の健全育成に役立つこと」を実践する場として、市内の小学校や子ども会等に対して、様々な体験メニューを提供している。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

「別俣農村工房」は、伝統的な農作業や郷土料理、また地区に伝わる行事・芸能等の農村文化、子どもから高齢者までの地域住民等、これらを地域の宝としてとらえ、この地域の宝を活用した体験交流活動を柱に、地域住民が一体となったむらづくりを進めている。

(1) 全住民参加による活動

廃校となった旧別俣小学校の木造校舎を地区のシンボルと位置づけ、ここを拠点として世代を超えた全住民が結束し、さらには地区外からの応援も得ながら活動を展開している。

(2) ビジョンに基づく着実な取組

小学生以上の全住民を対象とした地区の将来に関するアンケートにより集約された意見・要望を反映した地区の将来ビジョンである「『みんなのふるさと別俣』の4つの基本構想」を設定し、このビジョンに基づき、むらづくりを着実に取り組んでいる。

(3) 各世代が取り組める場を設定

子どもから高齢者までの住民全員が、地区の目指す方向を共有し、様々な形で参加ができる場を提供し、ここに住民自身が積極的に取り組むことにより、住民の誇りや生きがいにつながっている。

特に、技術と知恵の玉手箱である高齢者、バイタリティにあふれる女性達は、活動の縁の下の力持ちであり、



写真3 高齢者によるわら細工づくりの実演

当地区の取組にはなくてはならない存在である。

(4) 都市住民との積極的な交流推進

都市部からの来訪者を迎え入れる取組については、地域の特色を活かし、再び訪れたいくなるような充実した内容に向けて検討を重ねており、取組の企画・立案の段階から住民と一体となって活動を行っている。

(5) 新たな取組への探求

現状に満足することなく、地域住民と連携しながら地区の活性化に向け新規事業を検討することを心がけており、住民からの意見や要望を取り入れ、将来にわたり“ふるさとを誇りに思うことができる地域づくり”を目指している。

2. 農業生産面における特徴

「別俣農村工房」が農作業体験に使用する水田では、有機質肥料を用いて農薬を抑えたこだわりの栽培方法でコシヒカリを生産している。収穫した稲は、こだわりの稲架^{はさ}で天日乾燥を行い、良食味米生産に努めている。このコシヒカリは、地場農産物のブランド化として当地に生息する希少昆虫の名から「ハッコウトンボ米」と名付けて商標登録を行っている。

存続となった木造校舎については、体験交流活動の拠点として有効活用を図ることから、平成23年に校舎内に農家レストラン「ふるさと食堂『喜楽来』」を開設し、地元産の新鮮な野菜や山菜を用いた郷土料理を提供している。ここでは、昔懐かしい木造校舎で味わう地元のお母さん達の手づくり料理が人気を呼び、平成27年ではオープン時の約2倍となる約1,900人が利用している。



写真4 ふるさと食堂「喜楽来」

また、地元食材を提供することにより、地元産の農産物の生産が拡大し、地産地消の推進に寄与している。

3. 生活・環境整備面における特徴

「ふるさと食堂『喜楽来』」が位置する木造校舎は、体験交流活動の来訪者だけではなく、地区内の住民にとっても憩いの場所となっている。特に高齢者にとっては、校舎周辺に整備されたマツトゴルフ等の屋外活動が行うことができ、活動後にはふるさと食堂が社交の場となっている。



写真5 里神楽舞

当地区では、古くから行われてきた伝統行事の継承にも取り組んでいる。特に、春に行われる「里神楽舞」の披露においては、「別俣農村工房」のメンバー自らが伝承者を目指して、衣装の着付けや舞準備などに協力を行い、稽古にも積極的に参加し、地区の活性化に大いに貢献している。